土屋　博著『教典になった宗教』（北海道大学図書刊行会、二〇〇二年、ｉｉｉ＋二九〇頁）

芦名定道

本書は、宗教学と新約聖書学という二つの学問領域で多くの優れた研究成果を発表してきた土屋博氏が、その長年にわたる研究の全体像を提示した労作である。書評を担当するわたくしも、氏の研究に注目してきた者の一人として、本書の刊行を心から歓迎したい。

本書の内容紹介に入る前に、その意図について簡単に説明を行っておこう。本書は、いわば宗教学と聖書学とが交差する地点において書かれており、それは著者の思索の場を反映している。すなわち、本書の基本構想は「教えや思想の面から宗教をとらえるアプローチ」と「社会的集団行動の面で宗教をおさえるアプローチ」を適切な仕方で総合することであり、これは主知主義的な宗教思想研究だけ、あるいは宗教社会学的研究だけといった偏った方法によっては宗教現象の十分な理解に至ることはできないという認識に基づいている。またこれが、「既成宗教集団内部で蓄積された教典研究の自己完結性（閉鎖性）」に「風穴」をあけるという主張の意味するところでもある。しかし、こうした総合の試みは決して容易なことではなく、そのために著者は「教典論」という問題設定を行うのである。というのも、「教典は元来、文字に書き記された教えという面をもつと同時に、書物という形態によって宗教行動の中で用いられる」(三頁)ものだからである。こうして本書では、聖書を教典論のモデルケースとすると共に、宗教学的視点からのアプローチによって、聖書のイメージをできるだけ相対化する試みがなされるのである。

次に、本書の議論の展開をたどりながらその内容を概観することにしよう。

第一部「宗教学の課題としての教典論」で、著者がまず注目するのは、ミュラーの宗教学である（第一章）。しかし、著者の綿密な分析が示すように、ミュラーの宗教学の構造は決して単純ではない。確かに、ミュラーにおいては、東方諸宗教によって伝えられてきた各種の文献が翻訳・編集されるなど、キリスト教以外の諸宗教を比較研究するという宗教学的な問題意識が明確に確認できる。しかし、無限なるものが知覚される場に応じた「物の宗教」、「人の宗教」、「心の宗教」という宗教分類の背後に隠されているのは、キリスト教神学の三位一体であり、またその教典論のモデルはキリスト教の聖書に他ならない。ミュラーの宗教学は背後にキリスト教神学の動機付けをもち、さらにそこに進化の図式が結びつかられていたのである。このミュラーの思惟構造に従って、教典論は次のような二つの対照的な方向性において展開される。まずミュラーは、「書き記された教説」を超えて諸教説の根源にある本質にまで遡ろうとする。そこに見いだされたのが、「無限を認知すると同時に至高の美に向かうような詩的直観」、メタファーの形で表された「根源的直観」であり、これは、「教典成立の基盤に人間のもつ非教典宗教が存在する」という認識に他ならない。他方、ミュラーは宗教を論じるには歴史的諸宗教からアプローチせざるを得ないこと、書き記されたテキストである教典という歴史的形態が重要であることも十分に承知している。以上を論じた上で著者は、「教典の歴史的形態」や「文字表現の性格」の相対化という点にミュラーの教典論の意義を認めているのである。

ミュラーの教典論に続いて、著者は教典論を復興しそれを聖書学へと接続するために必要な問題状況の分析へと議論を進めてゆく（第二、三章）。まず、本書の「現在あらためて、宗教学的教典研究の可能性を問う」という学問的関心の背後にあるのは、近代聖書学

の歴史的・批判的方法の引き起こした諸問題である。すなわち、歴史的・批判的方法は、「普遍的統一理念を前提とする正典論に対する疑問」を生み出し、その結果聖書は、他の諸宗教の教典や歴史的諸文献との共通性において理解されねばならないことになった（聖書の相対化）。これに対して、ファンダメンタリズムは、自らの聖書理解が聖書自体に根拠をもつと主張することによって、聖書の正典性を無条件に肯定しようとする。これは歴史的・批判的方法への否定的対応（反動）であるが、教典論の視点から見れば、「教典受容の一形態」と解することができる。次に著者は、ファンダメンタリズムとは別の歴史的・批判的方法を乗り越える試みとして、聖書学における新しい文芸学的傾向（レトリック批評など）と社会学的傾向（Ｈ・Ｃ・キーの社会史的方法など）に言及するが、これらは第二部の聖書への教典論的アプローチにおいて取り上げられることになる。

第一部第四章では、教典論の視点からファンダメンタリズムとグローバリゼーションが論じられる。ファンダメンタリズムの究極的よりどころは、書き記され印刷された聖書という客観的な「もの」としての教典であり、それは一種の「聖像」のように機能している。しかし、こうした「もの」としての聖書への固執は、元来キリスト教にそなわっていた性格の一面が、世俗化に対抗する中で誇張されたものであって、ファンダメンタリズムは世俗化によって生じた現実とのギャップを調節する動的な運動と解釈できることが述べられる。次にグローバリゼーションであるが、著者はグローバリゼーションが全体的画一性としてだけでなく、「個々に分かれていく諸文化の形態とグローバルな全体性との緊張」として問題にすべきであると述べ、「グローバルとローカルを合成したグローカル」という言葉が事態を適切に言い表していると指摘する。著者によれば、教典論の視点を採用することによって、世俗化やファンダメンタリズムの中に、教典とのかかわり方を媒介した、「グローバリゼーションと個別化（個人化）との緊張関係」が確認できるのである。

続く第二部「教典論によって照射されたキリスト教史の諸断面」で、著者はキリスト教へと議論を進めてゆく。その意図は、「従来良きにつけ悪しきにつけ教典の明確なモデルを提供してきたキリスト教のケースをとりあげ、その歴史における若干の断面を教典論に照らして考察」(八七頁)することである。とくに著者が注目するのは、「実際の宗教生活の中で教典に期待されている機能」、「役割」であって、福音書（第一章）、牧会書簡（第二章）、内村鑑三（第三章）の三つのテーマが扱われる。

通例初期キリスト教における歴史記述の開始に位置づけられるのは、福音書記者ルカであるが、著者はルカ福音書プロローグについて、先行研究を参照しつつ、「ルカは、自らの視点から一貫した物語を構成するためには、虚構をも避けようとしない大胆な『著作家』であったのではないか」(九六頁)と推測する。このようなルカの文学的性格は、「教典を教典たらしめる宗教現象の根本動機」に関わるものであるが、著者は次に福音書において文学的性格という点で最も特徴的であるイエスの譬へと議論を進めてゆく。二〇世紀の中頃までの譬研究を規定していたのは、史的イエスに対する強い関心であったが、近年、譬という文学形式自体に注目し、そこから譬の機能を日常的現実との関わりで理解しようとする研究が現れてきている。それは、「最初イエスが語ったであろう譬がまずイエスの言葉伝承の中へとり入れられ、やがて福音書の文脈のうちにおかれるにともなって、これを宗教生活のために活用しようとする種々の状況の影響を受けつつ変容していく」(一〇九頁)というプロセスの中に――隠喩・寓喩・例話に通底するひと続きの動き――、「キリ

スト教の教典が形成されていくさいの重要な動機」、すなわち、「そのつど宗教集団の想像力に刺激を与え、宗教集団が『～教』として前向きにアイデンティティを形成していくエネルギー」(二六一頁)を掘り起こすという動機を見いだそうとする試みに他ならない。

こうして形成された教典は、宗教共同体内部で作用し続けることになる。著者は、この教典の機能を、牧会書簡の分析を通して明らかにしようとする。問題は、多様な歴史的現実の諸状況への教団の適応において教典に期待される機能と、牧会書簡に特有な、真正パウロ書簡を「模倣」しようとする論理であるが、その解明のために参照されるのが、知識社会学理論（とくに生活世界概念）を新約聖書研究へ適用するというキーの方法論である。著者はこれに文学批評的アプローチを統合することにより、キーの議論をさらに展開しようとする。その結論は次のようになる。「パウロと牧会書簡とのずれは、両者の時間的・空間的落差に起因するのではなく、むしろ共通の生活世界を基盤とするがゆえに生じたのではないかと思われる。そもそも宗教現象は、特定のカリスマ的人物だけで成り立つわけではない。そのカリスマに反応する信奉者たちがいて、はじめて教団が発生するのであり、そこではカリスマは、背後に横たわる生活世界の中へもどされた上であらためて受容される」(一五三頁)。牧会書簡は、市民倫理に従って生きている信奉者たちの視座からパウロを描いているのである。

では、教典がその背後にあった生活世界を超え、既存の文化の境界を越えて伝播するとき何が起こるのであろうか。著者は日本における聖書の受容を論じる中で、この点に迫ろうとする。そのために取りあげられるのが、内村鑑三であるが、著者によれば、内村は「聖書全部神言論」という主張に見られるように、ファンダメンタリズムの「もの」としての聖書への固執（聖書崇拝）へあと一歩の所にまで来ている。「内村自身は、それを慎重に避けようとした」(一六六頁)が、しかし、「書物としての聖書が教会のいわば代替物になっていく傾向は、内村の弟子たちにおいて一層明瞭になる」(一六八頁)。ここでの問題は、宗教生活における聖書の機能であるが、聖書は近代日本社会において、「近代化を推進するための心がまえをやや性急に模索していた当時の日本の知識階級」に対して、新たな生き方の規範を提示するものとして機能したのである。

第三部（「新約聖書学者」Ｒ・ブルトマン再考）のテーマはブルトマンであり、著者は「教典論の地平へ歩み入る一歩手前のところでふみとどまろうとする」ブルトマンを、「宗教」（第一章）、「非神話化」（第二章）、「哲学」（第三章）、「レトリック」（第四章）といった多面的な角度から論じている。しかし、各章の議論は教典論との関わりで言えば、基本的に同じパターンにおいて展開されているので、ここでは、「宗教」を中心に内容を見ることにしたい。

まず、「宗教」であるが、若きブルトマンは「あらゆる宗教の中に見出される神認識をいっそう純粋に展開したものがキリスト教信仰である」という宗教史学派的な宗教理解から出発し、その点でキリスト教を諸宗教との積極的関わりにおいて理解するという可能性を持っていたが、その後弁証法神学との関わりの中で、キリスト教信仰は宗教一般の中の一現象ではなく、非キリスト教的諸宗教との間には「矛盾」しかないという立場に移行してゆく。このブルトマンの立場を著者はオットーとの比較によって分析してゆくが、その結論は、「結局ブルトマンの宗教観は、宗教や宗教史の概念自体を清算していく過程においてあとづけられる」(二〇〇頁)というものである。この宗教概念の清算のプロセスと同

様の動きは、「非神話化」においても確認できる。というのも、ブルトマンは「キリスト教を一旦神話と関係づけ、そのあとであらためて歴史を強調する」からである。非神話化という批判的作業の終着点において、真のつまずきとしてケリュグマを据え、歴史の中にこそ「キリスト教の最後のとりでがある」という点を鮮明にしたことは、ブルトマンの神学的貢献であるとしても、それは結局二〇世紀の神話学一般との積極的な関わりを構築するものではなかった。これはブルトマンと哲学との関わりにおいても同様であり、哲学者ハイデッガーとの比較を通して、ハイデッガーが「宗教的なものへとつきぬけていくように見える」のに対して、ブルトマンの哲学理解は「特定の歴史にからめとられる」と結論づけられる。またレトリックとの関わりでも、ブルトマンは初期にレトリックへの関心を有していたが、ケリュグマ神学が自覚的に中心に据えられて以来、「非キリスト教的なものを積極的に受けとめるレトリック的性格」(二五一頁)は失われたと述べられる。以上第三部の全体において著者は、若きブルトマンがキリスト教信仰の歴史性を超える視点を有していたにもかかわらず、結局「神学ならぬ宗教学がとりくむはずの問題」と正面から向き合うことなかったと、教典論との関わりにおいて否定的な結論を下しているのである。

最後にいくつかの点についてコメントを述べることによって、この書評を終りたい。

①本書は教典論というテーマの下で宗教学と聖書学（キリスト教思想）とを総合するという大胆な構想を説得的に展開したものであり、その学問的な意義については強調しすぎることはない。しかし、「これは教典論の唯一の方法ではない。教典論なるものはまだ試論の段階」(二五八頁)にあるのであって、たとえば、第二部の議論について言えば、さらに多くの事例を検討することによって、教典論から見たキリスト教解釈をキリスト教史全体に広げてゆくことが今後必要になるであろう。この点については、著者のこれからの研究に期待すると共に、日本のキリスト教研究における教典論の高い水準での展開を望みたい。

②本書では著者の視野の広さに驚かされる一方で、教典論としては別の題材を取りあげた方がよかった、あるいはもっと説明がほしいなどと感じられる箇所が見られる。たとえば、第二部のレトリック批評の議論であるが、最近アメリカ聖書学などで盛んなレトリック批評――マック以外の――の全体的動向について著者がどのように評価しているかを知りたいと感じるのは、書評者だけではないであろう。また、第三部のブルトマン論であるが、教典論からキリスト教史を論じるという点から言えば、ブルトマンではなくむしろ弟子のエーベリングという選択もあり得たのではないだろうか。

③著者は錯綜した問題を見事に整理し論を展開しているが、その一方で、第三部のブルトマン論などは、ややパターン（若い頃の可能性とその清算）に縛られているとの印象を受ける。教典論という枠組みをはずしてブルトマン自身を論じるならば、「非神話化」における科学と神話の関係、神話と神話論の区別などについて、別の評価も可能なように思われる。この点はブルトマンと比較されたハイデッガーについても同様である。